Kobe Shoin Women's University Repository

Title	曖昧表現 ―その基本的性質と掛詞との関連について― Ambiguous Expressions -On Their Fundamental Characteristics and Their Relevance to kakekotoba-
Author(s)	坂本　勉（SAKAMOTO Tutomu）
Citation	文林（BUNRIN），No.25：1-30
Issue Date	1990
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

曖 昧 表 現

——その基本的性質と掛詞との関連について——

坂 本 勉

0. 本稿の目的

大まかに言えば，曖昧表現とは，二通り以上の解釈の可能性を持つ言語表現ということになるのだが，このように定義すると，ほとんどすべての言語表現は曖昧表現であると言うのに等しい。なぜなら，有限個の要素の組み合わせによって，無限に変容する現象世界を表現しようとすれば，個々の言語表現の負荷は莫大なものとなり，二重・三重の意味がその中に含まれるのは当然のことだからである。(1) このように，「曖昧」という語は広く一般に用いられているが，この語自体その指し示すものがはっきりしない曖昧な語である。ある表現が曖昧である原因・理由を探り，その表現の特質を明かにする必要があるであろう。本稿では，曖昧表現とは結局，「多価値型」と「群化型」という二つの基本型に分類され，ある表現が曖昧である原因はこの二つの型のうちのどちらかの性質を有している場合だけであるということを主張する。そこで，まず，この主張をそれぞれの言語レベル（音韻・語彙・統語）に於いて検証することを本稿の第一の目的とする。

曖昧表現は，情報伝達という重要な言語機能の観点からすれば，その伝達回路の円滑な運行を妨げるものであると一般に考えられている。しかし、これは一面的な見方にすぎない。曖昧性を意図的に用いるか否かによってその表現の持つ「効果」に大きな相違が出てくる。表現行為というものが自己を他者へと伝えるための行為であるならば，曖昧表現もまた自己から他者へのメッセージの一つである。このメッセージを組み立てることと解読することとの間に曖昧表現を仲立ちとした興味ある現象が見られる。そこで，意図的に用いられた曖昧表現の例として，文体的な曖昧表現，特に和歌（短歌）に見られる掛詞を取り上げ，その基本的性質が前述した「多価値型」と「群化型」とに二分されることを論ずる。これが本稿の第二の目的である。

1.　曖昧性の定義

「曖昧性」(ambiguity) と「漠然性」(vagueness) という二つの概念は混同されがちだが，明確に区別される必要がある。Binnick (1970) が述べるように，曖昧性は言語的な現象であるのに対し，漠然性は言語外的な現象である。[2] 漠然性とは，所与の言語表現そのものではなく，その表現によって表される対象が確定不可能な場合に生じてくるのである。この二つの概念を明確に区別する手段として，文末に 'and so do NP' を付加する方法を Lakoff (1970) は提案している。例えば，次の二つの文において，

（1）　Selma likes visiting relatives *and so does Sam.*

（2）　Harry kicked Sam *and so did Pete.*

(1) では，Selma と Sam の両方が「親類を訪れること」(going to visit relatives) を好むか，この両者がともに「訪れてくる親類」(relatives who are visiting) を好きであるかの二通りの解釈が可能である。しかし，Selma の方は「親類を訪れること」を好み，Sam の方は「訪れてくる親類」が好きである(あるいはその逆)という解釈は成立しない。ところが，(2) の文に於いては，Harry が右足で蹴ったか，左足で蹴ったかは決定不可能であり，また，どちらかに決定する必要もない。このことは，Harry と Pete の両者が共に右足あるいは左足で蹴ったという解釈も，Harry が右足，Pete が左足（あるいはその逆）で蹴ったという解釈も成立することから証明できる。

このように，「A・B共にXまたはY」という平行的解釈を要求するものが曖昧表現である。この平行的解釈に加えて，さらにまた，「AはX，BはY，あるいは，AはY，BはX」という交差的解釈が許される場合に漠然性が生じてくる。すなわち，(1)の曖昧性は，'visiting relatives' という言語表現自体の解釈の可能性が二通り以上存在していることに起因しており，(2)の漠然性は，'kick' という語の持つ「不確定性」(indeterminacy)（ここでは，右足か左足かということ）に依っている。

Lehrer (1974) は，曖昧性は，同一の語がいくつかの意味を持つことによって生じ，漠然性は，ある意味の広がりを持った単一の語に由来するものであると説明している。例えば，次の文に於いて，

(3) Not all men[1] are men[2].

'men[1]' は，[Male] と [Human] という素性を有しているが，'men[2]' は

更に［Brave, Virile, etc.］などの素性を持っていると Lehrer は述べている。すなわち，ここでは，‘men’ という語が「多義的」（polysemous）であることから曖昧性が生じている。このように，語彙レベルでの曖昧性は，「多義」（polysemy）と「同音異義」（homonymy）との問題として論じることが可能なのだが，この点に関しては後で述べる予定である。

ところで，Lehrer の漠然性の定義に依ると，語自体にある意味の広がりが存在し，その語が，それらの意味のうちのどれと同定されるかが決定不可能であると考えられそうであるが，これは正しくない。例えば，次の例文に於いて，

（4）彼女は花が好きだ。

彼女が好きなのが，具体的にどの花であるのか（例えば，ユリ，バラ，スミレ，等）は，「花」という語からは決定できない。なぜなら，「花」それ自体は様々な種類の花の総称であるから，上位語である「花」によってある特定のひとつの下位語を指し示すことはできないからである。このことは次の例によって明かである。

（5）彼女は花が好きだけど，バラだけは嫌いだ。
（6）*彼女はバラが好きだけど，花だけは嫌いだ。

（6）の文が意味的に不適格なのは，下位語の「バラ」が上位語の「花」よりも広いスコープを持つと解釈されてしまうからである。すなわち、「花」という言語表現自体の持つ意味がこの語の漠然性と関係しているのではな

く，上位語によって下位語を特定しようとすることが漠然性を引き起こすのである。

以上の考察から，曖昧性とは，ある言語単位に二通り以上の解釈が可能である場合に生じる，言語表現に固有の現象であり，漠然性とは，言語内的には決定不可能な言語外的要因によって生じるものであると言える。[8]

2. 各言語レベルに於ける曖昧性

言語表現は，ひとつの完結した全体性をもって機能するものではあるが，曖昧性は，音韻的・語彙的・統語的な言語の各レベルに於いて観察される現象であるから，各レベル別に考察を進めていくことが方法論的に有効であろう。

2.1. 音韻的曖昧性

音韻レベルに於ける曖昧性の第一の現象は，ある言語音が音韻的に二通り以上の解釈の可能性を持つ場合である。これは，「曖昧母音」(schwa) と呼ばれる［ə］がその代表であろう。この音は日本語の音韻体系の中に存在しないので，日本語の五つの母音のうちのひとつとして同定されなければならない。すなわち，この音には五つの解釈の可能性があり，五通りに曖昧であると言えるであろう。次の例では，

(7) machine［məʃi:n］— ┬ マシーン ［maʃi:N］
　　　　　　　　　　 └ ミシン ［miʃiN］

［ə］という同一の音が，［a］と［i］という異なった二つの音に解釈されている。この種の曖昧性は，異なった音韻体系を持つ言語間の借用に伴

って生じる場合が多いようである。そしてこの現象は，あるひとつの言語単位そのものが二つ以上の解釈の可能性を持つという，「多価値性」(poly-value) を有していることに起因している。

音韻レベルの曖昧性としては，次に，「連接」(juncture) の問題がある。これは，ある音の連続をどこで分断するかによって，異なる二つの意味が生じるという現象である。例えば，

(8) [əneim]- [ə/neim] (a name)
　　[ən/eim] (an aim)

(8) では，[n] という音が先行する [ə] と同一のグループに入って [ən] を形成するのか，後続する [eim] と同一グループとなって [neim] を形成するのかが問題となってくる。(一方，(7) では，曖昧母音 ([ə]) そのものの解釈が問題となっていた。) 結局，この現象は，ある音的単位を前後どちらのグループに組み入れるかという「群化」(grouping) の問題としてとらえることができる。そして，ひとたびいづれかのグループに群化されたなら，当該の音的単位 ([n]) は，ある語彙的単位 ([ən] または [neim]) の構成要素として機能する。つまり，群化型の曖昧性は，より大きな単位へと移行する際に現れる現象であると言えるだろう。

以上の考察から，音韻レベルに於ける曖昧性は，曖昧母音に代表されるような多価値型と，連接に見られるような群化型の二種類が存在することが分かる。(4)

2.2. 語彙的曖昧性——「同音異義」と「多義」

Leech (1969, p. 206) は，曖昧性は同音異義や多義，あるいは，両者の組み合わせによって生じ得ると述べている。[5] 彼の挙げている例は次のようなものである。

(9) I noticed a mole.

mole (noun) = 'a small animal'

mole (noun) = 'a spot on the skin'

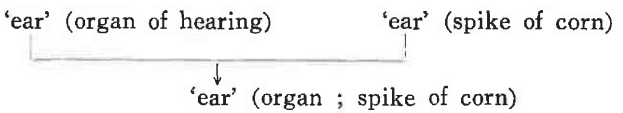
(10) Gentlemen prefer blonds.

prefer = 1. 'promote'

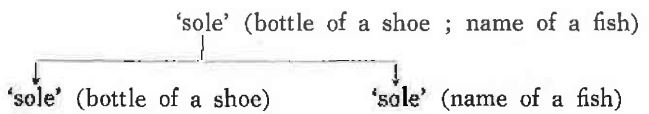
2. 'like better'

ここで，'mole'「もぐら」と 'mole' 「あざ」は偶然に同じく発音される異なった二つの語，すなわち，同音異義語であり，'prefer' は「抜擢する」と「より好む」という二つの意味を持つ多義語であると一般に考えられている。二つ以上の相異なる意味を表す同一の音形態が存在する時，その二つ以上の意味の間に語源的に何らかの関連性がある場合は多義であり，そうした関連性がない場合は同音異義であるとするのが従来の説であった。確かに，「もぐら」と「あざ」との間に何らかの関連性を見いだすことはむずかしいが，「より好む」人物を「抜擢する」ことは自然な事のように思える。ところが，こうした語源的関連性によっては説明できない例があることを Ullmann (1962) は指摘した。彼は，本来は同音異義語であったものが比喩的関連性を付与され，再解釈されて多義語になる場合もるあるし，さらに，元来は多義語であったものが意味的分裂を起こして同音異義語となることもあると述べている。このことは下のように書き表せる。

(11) 再解釈された同音異義語⟶多義語



(12) 多義語の意味的分裂⟶同音異義語



(11) に於いて，'ear' 「耳」と 'ear'「（とうもろこしなどの）穂」とは本来は同音異義語であったが，両者の形状が類似している（共に先が尖っている）ことから多義語として感じられていると Ullmann は述べている。これに対し，(12)では，もともとは多義語であった 'sole' 「靴底」と'sole' 「ひらめ」（共にひらべったいものである）との間の共通性が次第に感じられなくなり，今ではたまたま同じ発音だが全く別の語であるとして扱われていると彼は言う。通時的に見た場合に，同音異義と多義とはそれぞれ互いに入れ替わることがあるということを示すこの説明は，共時的な観点からすれば，この両者を区別することは不可能であり，また，区別することの必然性もないことを示唆していると言えるであろう。

上述したように，従来の語源的同一性による説明は，同音異義と多義との明確な区別の基準を与えることができないので，Lyons (1963) は，文法的な品詞をその基準とすることを提案している。例えば、'hammer'「ハンマー」（名詞）と 'hammer' 「ハンマーで打つ」（動詞）は品詞が異なるので同音異義語であるということになり，'division' (an arithmetic operation) 「割り算」と 'division' (a section of an army) 「分隊」と

は，共に名詞であるから多義語であるということになる。しかし，言語直感としては，二つの 'division' の方が，二つの 'hammer' よりも意味的により分離しているように思われると Lehrer (1974, p. 8) は述べている。Lyons は，ただ単に品詞の相違によってすべてを説明しているのではなく，文法的な「分布」(distribution) の観点から説明しようとしているのだが，いずれにせよ，このような機械的な区別の方法は，Lehrerが述べているように，母国語話者の直感に合致しない点が出てくる場合があるので，十分な説得力を持っているとは言い難い。さらにまた，同音異義か多義かという議論は語の意味に関するものであって，語の文法範疇，すなわち品詞の問題とは本質的に別のものである。

Weinreich (1963) は，言語とは，「記号」(sign) の集合であり，その記号の組み合わせによって発話が構成されると考えている。彼の言う記号には，'designator' と 'formator' の二種類があるが，大まかに言って,「実辞」と「虚辞」，「語彙形式素」(lexical formative) と「文法形式素」(grammatical formative) などの区別に対応する。ここで問題となるのは，'designator' の方だが，これはさらに，'sign-vehicle' と 'designatum' とに分けられる。前者は「音形態」(sound form), 後者は「意味素性」(semantic feature) にそれぞれ相当すると考えてよい。例えば，'coat' という記号は次のように表示される。

(13) coat [C1 • (C2 ∨ C3)]

C1 = 'garment'

C2 = 'of arm's length, worn over shirt'

C3 = 'knee-length, worn as the outermost piece'

ここで，C1 という共通の 'designatum' と C2・C3 のどちらの 'designatum' を組み合わせるかによって，coat (C1・C2) 「上着」と coat (C1・C3)「外套」との間に曖昧性が生ずるとするのが彼の説明である。このように，少なくとも一つ以上の共通の 'designatum' を持ち，他の 'designatum' が異なっているものを多義語であると彼は定義している。これに対して，共通の 'designatum' をその要素として持たない記号の一対(または一組)を，（共時的）同音異義として扱うことを彼は提案する。例えば，次のようなものである。

(14)　cry^1='shout', cry^2='weep'

(15)　fair^1='not foul', fair^2='not biased', fair^3='pretty good'

「脱曖昧化」(disambiguation) という観点からすると，多義語よりも同音異義語に対して文脈の及ぼす影響が大きいと彼は述べている。(6) 例えば 'crier' は一般に 'cry^1' を暗示するのに対し，'cry-baby' は 'cry^2' を示している。また，'fair judge' は 'fair^2' を，'fair weather' は 'fair^3' を指していると彼は主張する (p. 179–180)。

Weinreich の説明は明示的で説得力はあるが，素性分析の宿命的な欠点として，関与的な素性（彼の用語では 'designatum'）とはどのような性質を持っており，各語彙にどのように指定されるのかという問題がある。'coat' の例に於ける 'designatum' の性質は，この例に関する限りは妥当であるかもしれないが，一般性を欠いた，その場限りのものであるという印象を拭い得ない。また，'cry^1' と 'cry^2' との間の相違は，「声」を出すか「涙」を出すかの違いであって，共に「体内から何を出すか」という共

通の 'designatum' を指定することを拒む理由は何もない。すなわち，'coat' の例に従えば，次のような定式化も可能なのである。

(16) cry [C1・(C2 ∨ C3)]

C1＝ 'extract something from one's body'

C2＝ 'voice'

C3＝ 'tear'

そうすると，'cry[1]' と 'cry[2]' とは同音異義語ではなく，cry (C1・C2) と cry (C1・C3) という多義語であるということになる。このように，'designatum' の指定は多分に恣意的なものであり，この点を基準とした同音異義と多義との区別は明確なものではないと言えるだろう。

以上で論じた事から，語源的関連性や品詞・意味素性などによる同音異義と多義との区別は明確なものではないことが分かる。 Katz (1966, p. 33) が指摘するように，実際には，「意味の類似性の度合」 (a scale of sense-similarity) が存在しているのに，同音異義か多義かという二分法を求めることは，問題を単純化しすぎてしまうことになる。同音異義と多義との相違は絶対的なものではなく，段階的なものであり，程度の問題であると考える方が正しいと言えるであろう。結局，本質的な問題は，同音異義であれ，多義であれ，同一の音声形態によって示される概念が二つ以上存在するということであり，その二つの概念の間にどのような関連性があるかないかは二次的な問題にすぎない。すなわち，曖昧表現に関しては同音異義も多義も共に両義的であるという点に於いてはなんら区別はないのである。もちろん同音異義と多義とを区別することが全く無意味だと主

張しているわけではなく，曖昧性を引き起こす原因としては両者を区別することに積極的な意義を見いだすことができないということである。なお，語彙的曖昧性の場合，群化型の曖昧性を示すものは存在しないと考えられる。なぜなら，語彙の群化という問題は，次節で述べる統語的曖昧性として考察されるべきだからである。

2.3.　統語的曖昧性

統語的曖昧性は決して単一の現象ではなく，いくつかの型（pattern）に分けられるということは従来指摘されてきた。ここでは，文法関係の本質的相違に基づく分類について，従来の研究のいくつかを参照しつつ考察を進める。

Leech (1969) は，語彙的な同音異義と多義が存在するのと同じく、「文法的な同音異義」(grammatical homonymy) と「文法的な多義」(grammatical polysemy) とが存在するとして，次のような例を挙げている。

(18) I like moving gates.

(19) The center-foward Smith kicks hard.

(18) では，'moving gates' が「修飾語＋名詞」という構成であるのか，「動詞＋目的語」という構成を持つものであるのかによって，それぞれ，「私は動いている扉が好きだ」あるいは，「私は扉を動かすのが好きだ」というふうに解釈される。すなわち，'moving' が，「扉が動く」という自動詞と「扉を動かす」という他動詞のどちらとして解釈されるかによって二通りの解釈が可能なのである。(19) に於いては，英語の現在時制が，

発話のその時点における一回限りの出来事を表すのか，習慣的に繰り返される出来事を述べるのかという点に関して多義的であるから曖昧性が生じると彼は説明する。

ところが，前節で見たように，同音異義と多義とは，明確に区別できるものではなく，意味的関連性の度合の問題にすぎない。彼自身もこの両者を区別するのは難しく，伝統的には語源に依っているが，ここでは意味の類似性というおおまかな基準で十分であると述べている（p. 207)。Leech (1974, p. 230) は同音異義は，'happen to have the same pronunciation and/or spelling' ことから生じると述べているが，（18）の例に於いて，「動く扉」と「扉を動かす」とはたまたま同じ発音と綴を持っているだけでなんら意味的関連性は有していないと考えることには抵抗がある。'kicks' という一つの形態によって出来事の「一回生」と「習慣性」の二つの「相」(aspect) が表現されることが多義的であるならば，何故 'move' という一つの形態によって「自動詞」と「他動詞」とを区別することが同音異義的であり多義的でないのかは説明できないであろう。これはやはり，共に，二通りの文法関係の可能性を持つことによって生じる，多価値型の曖昧性と考えるのが妥当であろう。前節で見たように，曖昧性の議論に関しては，同音異義と多義の観点から論ずることは適切ではないのである。

統語的な曖昧性に関しても，いままで考察してきたように，語が句へと群化される時に生じる曖昧性と，語と語との間の本質的な文法関係の変化に起因する曖昧性の二つを区別するのが適当だと思われる。次の例に於いて，

（20）太郎はたくさんのバラとスミレを買った。

(21) 太郎は花子に自分の部屋で勉強させた。

(20) では，「バラ」が「たくさん」に群化されるのか,「スミレ」と同じグループに入るのかによって二通りの解釈が可能になる。すなわち,「(たくさんのバラ) と (スミレ) 」と「 (たくさんの) (バラとスミレ) 」との違いである。前者の解釈では「バラ」はたくさんで「スミレ」は少ししか買わなかったという可能性があるが，後者の解釈ではそのような可能性はない。本稿ではこれを「表層構造に於ける曖昧性」と呼ぶことにする。これは結局，「バラ」を前後どちらのグループに組み分けるかという問題であり，音韻的曖昧性の節で考察した「連接」と同じく群化型の曖昧性なのである。ひとたび「バラ」が「たくさん」と同一グループと見なされたら，それは「形容詞＋名詞」という文法関係を形成し，後続する要素と同じグループならば，「名詞＋名詞」という文法構造の一部を成すと見なされる。一方，(21) に於いては，ある特定の要素が前後どちらのグループに組み分けられるのかということは問題とはならない。ここでは,「自分」が「太郎」を指すのか「花子」を指すのかによって，「花子が太郎の部屋で勉強する」と「花子が花子の部屋で勉強する」という二通りの解釈が可能となる。本稿ではこれを「深層構造に於ける曖昧性」と呼ぶことにしよう。すなわち，(21) の曖昧性は深層構造に於いて「自分」という補文の主語が主文の主語 (太郎) あるいは目的語 (花子) のどちらと同じものとして解釈されるかに依って生じる曖昧性である。これは，同一形態が二通り以上に解釈される可能性を持つという事から，多価値型の曖昧性を表すものであると言えるであろう。

ここで，曖昧な文がどうしたら曖昧でなくなるのかという「脱曖昧化」

の視点から統語的曖昧性の問題を考えてみよう。Woolley (1975) は，二つの異なった「構成素境界」(constituent boundary) を持つ曖昧文とそのような境界を持たない曖昧文とを区別している。例えば，次の文に於いて，

(22) There are only old men and women here today.

構成素境界がどこに位置しているかを聞き手が決定できれば，この文は脱曖昧化される。すなわち，(old men) (and women) か (old) (men and women) かのどちらかに決定できる。この文は結局，'men' が前後どちらのグループに入るかによって生じる曖昧性で，統語的には (20) の例と同様に，「表層構造に於ける曖昧性」であり，本稿で主張する「群化型」の曖昧性であることは明白であろう。これに対して，構成素境界の指定によっては脱曖昧化できないのは次のような例である。

(23) Flying planes can be dangerous.

この例文では，'juncture', 'pitch', 'stress' などが脱曖昧化を行うための重要な手がかりであり，しかも，この順序で重要性が高い(つまり，'juncture' が最も重要となる) と Woolley は述べている (p. 661)。(23) の例文に於いて，「閉鎖連接」(closed juncture : すなわち，Flying と planes の間にポーズがない場合) で，'flying' に強いストレスがあれば，'planes fly' すなわち，「主語—動詞」の関係を示し，「解放連接」(open juncture : Flying と planes の間にポーズあり) で，'planes' に強いストレスがあれ

ば，‘to fly planes’ すなわち，「動詞—目的語」の関係を示す。(23) の曖昧性は深層構造に於いて異なった二つの文 (‘It can be dangerous to fly planes.’, ‘It can be dangerous that planes fly.’) がいくつかの変形規則を受けた結果たまたま同一の表層構造を持つことによって生じているということになるだろう。これは結局，‘fly’ が自動詞か他動詞かという多価値型の曖昧性である。

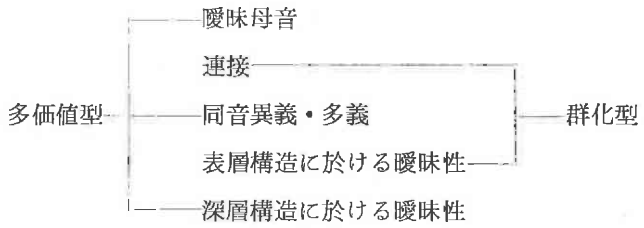
このように，Woolley は，脱曖昧化の観点から二種類の曖昧性を区別しているが，どのようにしたら曖昧でなくなるかということは，なぜ曖昧なのかということを対称的な視点からとらえたものである。そして，この二種類の区別は本稿で主張する，「群化型」—「多価値型」の区別に対応する。

以上の考察から，統語的曖昧性は，表層構造に於ける曖昧性と深層構造に於ける曖昧性という二種類に区別されることが分かった。そして，前者は表層に於ける構成素がどのようにグループ化されるかという群化型の曖昧性，後者は同一の構成素連続が二種類の文法関係を示す多価値型の曖昧性をそれぞれ示している。

2.4. 要　約

言語表現に於ける曖昧性は，言語表現の各レベル（音韻・語彙・統語）に於いて見られるものであるが，従来の研究はこうした曖昧性を統一的に説明することが出来なかった。本稿では，曖昧性は，「多価値型」と「群化型」の二種類に還元されることを論じた。多価値型は，同一の要素が二通り以上の解釈の可能性を有することから生じる曖昧性を指す。群化型は，ある要素が前後どちらのグループに組み入れらるかによって生じる曖昧性

を示し，この型は，より大きな言語単位への橋渡し的な役割を果たしている。いままでの考察をまとめると，次のようになるであろう。



3. 文体的手段としての曖昧性

曖昧性は偶然の結果生じることもあるが，意図的に利用される場合もある。その典型的な例が，文学作品に於いて文体的効果を意図して用いられた曖昧性である。Empson (1930) は，曖昧という概念を用いて文学作品の明示的な分析を試みた。彼は，この概念をかなり広い意味で使っており，言葉のニュアンスすべてを曖昧と呼ぶことを提案している。(7) 彼は曖昧を七つの型に分けて，それぞれについて詳しく説明を行っているが，その分類の基準というものが明確ではない。彼の煩雑にすぎる分類は，印象主義的な文芸批評に対するアンチテーゼとして，言語事実に即した精密な分析を提示しようとした結果であろう。たしかに，文学作品の分析という困難な問題に対して，曖昧という言語表現に特有の現象からアプローチしていくのは正しい方向であったかもしれないが，彼はその曖昧という概念をあまりにも広く用いすぎてしまったために論点を明確にすることができなったのであろう。

Leech (1969) は，日常言語に於ける曖昧性と文学作品に現れる曖昧性

とを区別しており，文学テクストに於ける曖昧性とはすなわち,「多重的意義」(multiple significance) を有しており，これは，「多価値的性格」(MANY VALUED character) を持つものであると述べている。そしてこうした意味の多重性をひとつの言語表現の内に「平和共存」(peaceful coexistence) させることを意図しているのが文体的手段としての曖昧性であると彼は指摘している。そこで，これから，前節までで考察した曖昧表現の二つの基本型である「多価値型」と「群化型」とがどのように文体的に利用されているかを掛詞をひとつの例として考察してみる。

3.1. 掛　詞

掛詞を広義に解釈した場合，「地口（口合）」・「だじゃれ(しゃれ)」・「語呂（路）合せ」・「もじり」など多くのものが含まれる。これらのひとつひとつについて詳しく論じることはしないが，こうした言語遊戯に関しては，綿谷（1964），鈴木（1959, 1969）などを参照されたい。[8]

言語学的•詩学的観点から地口(pun) を扱ったものとして Leech (1969) がある。彼は，地口を利用した文体的技法の例を六種類挙げている。このように，日本以外の国の文学にも掛詞と同種の技法は見られるが，掛詞を一つの手法として高度に発展させたのは日本の和歌文学に特有のものであろう。これはおそらく，日本語ではリズムやアクセントや押韻などを有効に利用できなかったということと，和歌が三十一音という制限の内でより多くことを表現するために積極的に曖昧性を利用したためであろう。掛詞には「懸詞」の字を当てることもある。他に，「言い懸け」・「秀句」・「兼句」などと呼ばれることもある。用法としては万葉集の時代から既に見られるが，和歌の技法としては，平安時代以降に特に著しい発達を遂げ

た。それ以前には，修辞技法としては，枕詞・序詞などが主であった。[9] 従来，掛詞は，同音異義を利用して一語で二つ以上の意味を表現する修辞法であると説明されてきた。掛詞となっている語が表すそれぞれ別の二語，または二つの異なった語の意味が示すものは同一品詞でなくてもよく，同一音であればよい。ただし，清濁の区別はない。これ以降，掛詞の分類に関する従来のいくつかの研究を取り上げて考察する。

3.2. 二種分類

掛詞に関する近代での最も重要な初期の研究は，時枝（1941）のものであろう。彼は，掛詞を「一語によって二語に兼用し，或いは前後句を，一語によって二つの異なった語の意味に於いて連鎖する修辞学上の名称」と定義している。ここで，「兼用」と「連鎖」の二種類が区別されているわけだが，彼は次のような例を挙げて説明している。[10]

(24) 兼用：「花の色はうつりにけりな徒にわが身世にふる
ながめせしまに」（古今・春歌下，113）

(25) 連鎖：「梓弓はるの山辺を越えくれば道もさりあへず
花ぞちりける」（同上，115）

兼用型の（24）で，「ふる」は「経る」と「降る」の二語に，また，「ながめ」は「詠め」と「長雨」の二語に兼用されていると時枝は述べている。ここで注意すべきことは，「ふる」や「ながめ」は先行あるいは後続する要素との統語的関係とは全く無関係に二つの意味を持っているということである。これはすなわち，語彙的な多価値型の曖昧性を利用して歌に多様

性を与えたものである。一方，連鎖型の（25）では，「はる」は先行する「梓弓」に対しては「張る」の意味に於いて用いられ，後続の「山辺」に対しては「春」の意味として解釈される。時枝は，連鎖型の掛詞を観察すると，これは決して語の多義的用法ではないことが明かであると述べているが，それは当然のことである。なぜならば，この型の掛詞はそもそも語彙的な多価値型の曖昧性ではなくて，統語的な群化型の曖昧性に関わっているからである。つまり，「梓弓はるの山辺」に於いて，「はる」という語が「目的語＋動詞（張る）」と「名詞（春）＋の＋名詞」のどちらの統語構造に組み込まれるかという視点から考察されなければならないのである。時枝の「兼用」と「連鎖」という区別は正しい洞察であったが，両者を共に語彙的な問題であると考えたところに欠点があったと言えるであろう。

時枝は，表現効果の観点からすれば，兼用型の掛詞は「協和美」を構成し，連鎖型の掛詞は「旋律美」を構成すると述べている。特定音声をＳとし，Ｓを媒介とする二重過程によって喚起される概念をＡＢとする時，ＡＢ両概念がほとんど同時に喚起され，あたかも音楽における和声のような配列をなすものが協和美を作り出すと時枝は主張する。兼用型は，二つの意味を同時に持つ多価値型であるから，和声的な同時進行の協和美を表現することは当然であろう。これに対し，まずＡが喚起され，次にＢが喚起されるという，音楽に於ける旋律的展開を示すものが旋律美を形造るということである。連鎖型はある要素がそれに先行する要素と同一グループを成すか，後続する要素と同じグループに組み込まれるかという群化型の曖昧性を利用したものだから，その要素が同時進行的に異なる二つの意味を表すことはありえない。そこで，その美的効果が「流れ」としての旋律美

と密接に関わっているのは当然である。

協和美・旋律美というのは，掛詞の美的効果の形式的側面を示すものだが，その質的側面に関わっているのが滑稽美と呼ばれるものである。これは，Ｓによって喚起されるＡＢ両概念の意味的関連性の度合によって決定される。一般に，掛詞の優れた技巧は，この二つの概念の極めて目だたない自然な展開・対比にあると時枝は言う。例えば，

(26) 山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば
（古今・冬歌，215）

に於いて，「かる」という語は，今日考えられている「離る」と「枯る」の対立程大きくないものであって，「水かる」とか「声かる」などと用いられるように，物の量の減少していくことを示しているので，喚起される二つの概念の間に密接な関連性があることを時枝は指摘している。これに対して，ＡＢが意想外の展開である場合に滑稽美が生じる。例えば，

(27) 山吹の花色衣ぬしやたれとへどこたへずくちなしにして
（古今・雑体・俳諧，1012）

この歌に滑稽味が感じられるのは，「くちなし」を媒介とする「梔子」と「口無し」との対比が意表を衝くからである。このように，概念の対比が大であり，しかも，それが一首の中に総合統一され，主想と伴想とが巧みに織りなされているところにこの歌の滑稽的技巧が存在すると時枝は考えている。

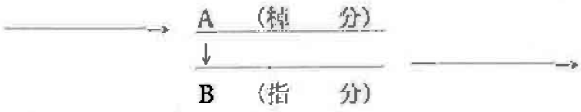
時枝は，「掛詞は一語多義的用法ではないから，決して曖昧な語の用法とはいうことができない。寧ろ共通音声によって喚起せられる二つの概念の間には，明瞭な対比が意識せられているということが出来る」(p. 530)と述べている。しかし，兼用型の掛詞の場合に問題となるのは，同一音声によって喚起される概念の間の意味的関係は，明瞭な対比を示すものから近接的なものまであるということである。このことは時枝自身，滑稽美の説明の際に指摘していることである。例えば，「離る」—「枯る」という近接的なものから，「梔子」—「口無し」という対比的なものまである。従来は，この近接的な意味関係を有するものを多義，対比的意味関係を示すものを同音異義と呼んでいた。しかし，２・２節で考察したように，両者を明確に区別するための客観的基準を設定することは困難である。時枝自身も「離る」と「枯る」は多義語的であったものが同音異義語的に変化していることを認めているわけだから，滑稽美に於ける意味的関連性の度合とは本質的な相違ではなく，時代の変化などによって変化するものであると言えるであろう。

3.3.　三種分類

掛詞の基本的な型としては，前節で見たように，兼用型と連鎖型の二つがあるわけだが，柿本（1969）は，一首の中でその連鎖または兼用に様々な技巧の凝らされることが多いことから，「連鎖」・「響かす」・「両立」の三種に分けている。それぞれについて，彼の図示したものに従って簡単に見てみる。

(28) 連鎖：「玉江漕ぐ芦刈小舟さしわけて

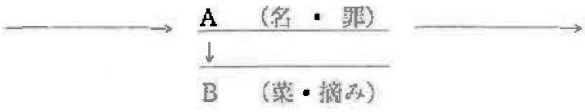
誰を誰とか我は定めむ」（後撰・雑四，1251）



ここで，「棹分」（A）は序詞を受けた所で「指分」（B）に転換し，転換と同時に下句への連接を断たれ，想の流れもBの方に移り，「棹分」の意味はそこで立ち消えになると柿本は述べている。

(29) 響かす：「春日野の飛火の野守見しものを

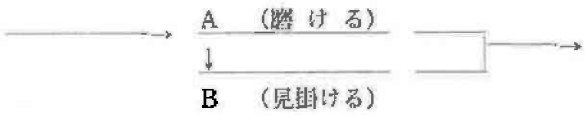
無き名といはば罪もこそ得れ」（同上，663）



ここでは，「名」・「罪」にそれぞれ，「菜」・「摘み」を響かし，共に「春日野」と縁語関係を成すが，響かされた語はその場きりで前後との承接を持たないということである。

(30) 両立：「清けれど玉ならぬ身のわびしきは

みがけるものといはぬなりけり」（同上，726）



ここでは，「磨ける」の意（A）と「見掛ける」（姿ヲ見タダケデ逢ッタノデハナイ）の意（B）とが両立し，その両意が「ものと」云々に統合されていると柿本は主張している。

柿本の言う「連鎖」と「響かす」の区別は，明らかに時枝の「連鎖」と「兼用」の区別に対応する。つまり，前者は群化型，後者は多価値型の曖昧性を利用したものである。上の図示に於いて，水平の矢印は想の流れを垂直の矢印は想の転換を表しているが，「連鎖」に於いてはその流れが別の方へと移るのに対し，「響かす」では，そうした想の流れは変化しないという違いがある。これに対して，「両立」に於いては二つの流れが合流するという特色が見られる。しかし，「両立」は基本的には「響かす」と同じ構成を持っており，ただ，後続する想の流れとある種の関連性を有しているというだけのことである。

結局，柿本の三分類は基本的には二種類に分けられるであろう。彼自身も,「響かす」と「両立」は「連鎖」に対して，いわゆる兼用型としてまとめることができるし，「連鎖」と「両立」は，「響かす」に対して，「かける」としてまとめることができると指摘している。柿本の三分類の基準は，歌によって表される全体の流れが掛詞の箇所でどのように変容し，その後どのような流れになっていくのかという視点からなされていると言えよう。同様にして，井手（1970）は，文の展開や文意との関係から，次のような三種に分類している。

- 文の連接に関係する……連鎖型
- 文の連接に関係しない
  - 文意に関係する……含蓄型
  - 文意に関係しない……物名型

これら三種類について具体例を見ながら考察してみたい。

(31) 連鎖型：「百に千に人は言ふともつき草の
移ろふ心吾れ持ためやも」（万葉，十二，3059）

ここでは，上三句の序詞を受けて，つき草（露草）の花がすぐにすぼみ衰える意の「移ろふ」から，心変わりする意の「移ろふ」に転じている。つまり，掛詞を契機として，先行の表現を後行の表現に連鎖しつつ転換させたもので，序詞や枕詞を受けて用いられることが多いと井手は述べている。

(32) 含蓄型：「海松藻刈る潟やいづくぞ棹さして
吾れに教へよ海女の釣り船」（伊勢，七十段）

ここでは，「海松藻」に「見る目」，「刈る」に「離る」，「潟」に「方」の意を連想・喚起させ，歌の表現に含蓄を与えている。歌の表面的な意味と平行して，それに関連する別の意味を連想・喚起させる。また，こうした掛詞に於いては，縁語関係を持つ言葉を結び連ねることが多いことが従来から指摘されている。

(33) 物名型：「彼の方にいつからさきに渡りけん
浪路は跡も残らざりけり」（古今・物名，458）

ここでは，「からさき」の部分に，地名の「唐崎」が掛けてある。このように，歌意とは無関係に，むしろそれと知られ難い形に物名を詠み込むの

がこの型の特徴であると井手は述べている。

井手の言う連鎖型が，時枝，柿本の「連鎖」に相当することは明白であろう。含蓄型というのは，時枝の「兼用」，柿本の「響かす」に対応する。物名型は，本質的には含蓄型と同じである。含蓄型の中で，物の名前（特に地名）を詠み込んだものを物名型と呼んでいるにすぎない。物名型は「隠し題」と称されることからも判るように，かなり遊戯的傾向が強いと言える。結局，井手の三種分類も基本的には二種分類と同じであることが分かる。

ここで，時枝・柿本・井手の三者に共通しているのは「連鎖型」である。この型は，前後の要素とどのような統語的関係を持つかという問題とは不可分であるという点で他の型とは明確に区別される。三者が共にこの型を認めているいは決して偶然の一致ではない。一方，時枝の「兼用型」に対して，柿本が「響かす」と「両立」，井手が「含蓄型」と「物名型」とをそれぞれ区別しているのは，これらに分類される掛詞が語彙的にAまたはBという両義的な曖昧性を利用しているために，AとBとの間の意味的関連性の相違（「響かす」と「両立」との関係）やAまたはBの意味的特徴（「含蓄型」と「物名型」との関係）などを区別することが可能だからである。

4.　結　　論

曖昧性は，所与の言語単位による表現対象が複数個存在するという多価値性の問題，あるいは，所与の言語単位をどのように群化するかという問題としてとらえられる。すなわち，曖昧性は，多価値型と群化型という二つの基本型に分けられる。この二つの基本型は言語の様々なレベル（音韻

・語彙・統語）に於いて観察されるものであるが，多価値型が同一レベルでの曖昧性に関わっているのに対し，群化型は二つのレベルにまたがった曖昧性に関わっている。この二つの基本型を区別することによって，言語レベルに於ける曖昧性を統一的に論じることが可能となった。

曖昧表現に於いては，伝達の確実性が失われるという側面もあるが，同時にまた，表現の豊かさを増すという可能性も持っている。こうした曖昧性を文体的手段として意図的に利用している例として掛詞を考察した。(11) 掛詞を分類する際に，歌意の流れや特色など様々な基準を設定することが可能であるが，その基本型は「兼用型」と「連鎖型」であり，それぞれ，「多価値型」と「群化型」の曖昧性を積極的に利用していることが明かとなった。

≪注　釈≫

（1）あらゆるディスコースには，潜在的に曖昧性が存在するという見方に関しては，Haroche (1975) を参照。彼はこの曖昧性を社会的関係において考察している。

（2）"...vagueness is not a concept which applies to language at all, but rather to the ideas which language expresses. Words are vague insofar as they represent vague concepts, but they are ambiguous in their own right. The implication of this is that the context relevant to vagueness is non-linguistic, whereas that relevant to ambiguity is linguistic." Binnick (1970, p. 151)

（3）Khatchadourian (1965) は，確証 (confirm) することは不可能であるが，全体として意味がないわけではない発話が「莫然とした命題」(vague proposition) を構成すると述べている。こうした発話は，ある意図は持っているが，分析的 (analytic) でも総合的 (synthetic) でもない。彼はまた，莫然性は程度の問題であって，「正確な表現」(precise expression) と「莫然とした表現」(vague expression) と「無意味な表現」(meaningless expression) とは明確に区別できないことを指摘している。

（4）連接，その他の音韻的曖昧性については，Kooij (1971)が詳しい。

（5）同音異義に於いて，'mail'（郵便）と 'male'（男性）のように，綴り字が異なるものを「同音異綴異義語」(homophone) と呼んで，'bank'（銀行）と 'bank'（土手）のように同じ綴りのものと区別することもある。日本語では，かな表記では同一の綴りだが，漢字では異なった表記になるのが普通である。これは，表音文字と表意文字との差異である。

（6）脱曖昧化に関しては，本稿では詳しくは取り扱わないが，「音声的きっかけ」(phonetic cue) による実験については，MacKay (1966), MacKay and Bever (1967), Levelt et al (1970), Sag and Liberman (1975), 次節(2.3)で述べる Woolley (1975) などを参照のこと。

（7）これは，1930年の初版での提案で，1947年（p. 1）の再版では，この提案はもう少し細かに，「同一の表現に対して二者択一的な反応の余地がある時，たとえそれがわずかなものであっても，言葉の持つこのようなニュアンスを曖昧と呼ぶことにしたい」と変えられた。

（8）いわゆる「だじゃれ」にも「墓のない人生ははかない人生」という多価値型と「その手はくわなの焼き蛤」などの群化型が存在しているが，この点については本稿では詳しい考察はしない。

（9）この点に関しては，根来（1955），綿谷（1964）などに歴史的考察が見られる。

(10) 時枝の二種分類の区別に従うものとしては，根来（1955），大久保（1966）などがある。

(11) 掛詞が文体的手段である以上，それが効果をあげることもあれば失敗することもあるであろう。ここでは，「可能性」について論じているわけであって，掛詞を使えば使うほどその表現効果があがると言っているわけではない。

≪参考文献≫

Binncik, R. I. (1970) "Ambiguity and Vagueness." *Proceedings of the Sixth Annual Meeting of the Chicago Linguistic Society.* 147-153.

Empson, W. (1930) *Seven Types of Ambiguity*. London: Catto and Windus. 岩崎宗治 訳『曖昧の七つの型』研究社，1974.

Haroche, C. (1975) "Grammaire, Implicite et Ambiguïté." *Foundations of Language* 13, 215-236.

Katz, J. J. (1966) *The Philosophy of Language*. New York: Harper and Row. 西山佑司 訳『言語と哲学』大修館，1971.

Khatchadourian, H. (1965) "Vagueness, Verifiability and Metaphysics." *Foundations of Language* 1, 249-267.

Kooij, J. G. (1971) *Ambiguity in Natural Language*. Amsterdam: North-Holland.

Lakoff, G. (1970) "A note on vagueness and ambiguity." *Linguistic Inquiry* 1, 357-359.

Leech, G. N. (1969) *A Linguistic Guide to English Poetry*. London: Longman.

Leech, G. N. (1974) *Semantics*. Harmondsworth: Penguin. 安藤貞雄 監訳『現代意味論』研究社，1977.

Lehrer, A. (1974) *Semantic Fields and Lexical Structure*. Amsterdam: North-Holland.

Levelt, W. J. M. et al (1970) "Ambiguous surface structure and phonetic form in French." *Foundations of Language* 6, 260-273.

Lyons, J. (1963) *Structural Semantics*. Oxford: Blackwell.

MacKay, D. G. (1966) "To end ambiguous sentences."*Perception & Psychophisics* 1, 426-436.

MacKay, D. G. and T. G. Bever (1967) "In seareh of ambiguity." *Perception & Psychophisics* 2, 193-200.

Sag, I. A. and M. Liberman (1975) "The intonational disambiguation of indirect speech acts." *Proceedings of the Eleventh Annual Meeting of the Chicago Linguistic Society*. 487-497.

Ullmann, S. (1962) *Semantics: An Introduction to the Science of Meaning*. Oxford: Blackwell. 池上嘉彦 訳『言語と意味』大修館，1969.

Weinreich, U. (1963) "On the semantic structure of language." in *Universals of Language*. J. H. Greenberg (ed.), 142-216.

Wooley, D. E. (1975) "How lecturing linguists lecture linguistics: some disambiguating phonetic cues." *Proceedings of the Eleventh Annual Meeting of the Chicago Linguistic Society*. 661-671.

井手　至（1970）　「掛け詞の源流」，『人文研究』21-6.
柿本　奨（1969）　「掛詞のかたち」，『国語国文』38-10.
根来　司（1955）　「懸詞」，『解釈と鑑賞』229号.
大久保　正（1966）　「万葉集東歌の掛詞について」，『万葉』61号.
鈴木　棠三（1959）　『ことば遊び辞典』東京堂出版.
鈴木　棠三（1969）　『日本語のしゃれ』講談社.
時枝　誠記（1941）　『国語学原論』岩波書店.
綿谷　雪（1964）　『言語遊戯の系譜』青蛙房.